

村野次郎創刊

香蘭

香蘭

2019年(令和元年)6月号
第96巻 第6号 通巻1062号

目次

村野次郎作品 私の愛誦歌(46)	石井・西野・大井田・朝香・飯島	大井田 啓子	表二
作品一特選(六月号)	伊藤(康)・相川・八木橋・水本	松田 恭子	21
作品二・三特選(四月号)	江口・岡野・中村(か)・松沢・岩田・杉山(ま)	千々和 久幸	22
近詠十五首 公園の春	牧田・三浦(伶)・武藤・竹本・藤本・安田・中村(陽)	水本 美恵子	46
作品一	城 富貴美	石井 雅子	48
作品二		千々和 久幸	49
作品三		丸山 静子	52
香蘭集		香山 三枝子	54
推薦香蘭集		丸山 明子	56
香蘭集		和山 羊子	58
歌の生まれる場所(77)	鈴木(知)・生田・江口	千々和 久幸	60
村野次郎への旅(111)		田端 久幸	62
焦 点(四月号) 老いの歌		水本 美恵子	72
近詠十五首「追憶」評(四月号)		長野 道子	73
七首抄(四月号)		田端 久幸	77
作品一特選欄評(四月号)		鈴木(知)・生田・江口	77
作品一		和山 羊子	77
作品二		丸山 明子	77
作品三		香山 三枝子	77
緑地帯		千々和 久幸	77
明宝研究会第一〇五回三月例会		田端 久幸	77
文法あれこれ(1)		水本 美恵子	77
他誌拝見 103		長野 道子	77
歌書管見 光本恵子評論集「口語自由律短歌の人々」評		田端 久幸	77
他誌に掲載された香蘭会員の作品と動き		水本 美恵子	77
歌会及び会合・会員消息・他		長野 道子	77
編集後記・新宿日記		田端 久幸	77
表紙絵……中村 陽子「鏡を置けば……」		水本 美恵子	77
目次カット……和田 和雄		長野 道子	77



2019年(令和元年)6月号

第96巻 第6号 通巻1062号

次郎先生最晩年の作品集『角筈』(遺歌集)に収録されている。八十歳前後七年間の歌を収めた歌集である。

仰向けに寝かされ宙にあげし子の まだ土踏まず清き足裏

「角筈」

「子」は先生がこの年齢からみてお孫さんであろう。まだ寝がえりの打てない子は生後半年位だろう。仰向けに寝かされているが両手を宙にあげ頻りに動かし足も盛んに動かしている様子が窺える。まだ一度も地に立ったことのない赤ん坊の足裏に着目した一首。長い年月様々な人生経験を経てこの年齢を生きる先生にとつて柔らかなこの世の厳しさを全く経験していない赤ん坊の足裏は清らかで眩しいばかりである。慈愛に満ちた眼差しを注ぎながらも、この子がこれから遭遇するであろう数々の困難に思いを馳せずにはいられない。目の前の子の清らかな足裏を見ながら自らの生きてきた生涯を思い浮かべて静かに感慨に浸っている先生の姿が浮かぶ。

『角筈』48頁、『村野次郎三百首』109頁に所収

四 選 者 の 作 品

歌会にて

平塚 千々和 久 幸

ほどほどに力が抜けてと捨て歌を褒められており今日の歌会に褒められてのち貶されて歌会は時にきびしくまた愉しもよ捨て歌も必要などと言うなかれへばだからこそ先生である歌会は司会者次第などなどちやちや入れ今を愉しまんとすコーヒーがコーヒー・マシンより滴れる間に唇歌ひとつメモせり報わることの少なき努力をも見て月々の選歌を急ぐ

無為に徹せよ

横 浜 渡 辺 礼比子

三度目の歌会終えたる本牧のバス停脇に木蓮ふふむ
ルッコラとともに洗われ茎太き野良坊菜ほろり黄の花こぼす

〔男前豆腐〕肴に飲みながら師は言いませり無為に徹せよ

川崎駅前歩道橋に仰くおぼろ月たれも酒徒にて相身互身

悩んでもしょうがないから歌ってるはちみつさんかんのど館の歌
スス病の紅梅伐らんと語るとき寒気に震う二輪の花よ

イカ刺しを頼めばイクラおろし来る外人スタッフ励む居酒屋
パソコンが差し出がましく物申す「ミスが増えました、休憩しませんが」

春の潮

鎌 倉 香 山 静 子

さあ今日はコートを着ないで出掛けよう春の潮が呼んでいるから
一生のおほかた過ぎてのぞき見る春の川面にゆるる総身
さくらさくら桜の下を過るととき隠り世の人かたはらに立つ
水の面に届かむとして届かざるしだれ桜の逡巡も見つ
雨となる気配に昏れゆく庭隈に何を探すや山鳩一羽
若き日のバスポートよりほろほろとこぼれ来るなりとほき思ひ出
一時代築きし人ら次々と亡くなり今日で平成も消ゆ
何事も「どうぞお先に」と押し出さるつまりは年長といふことならむ

春 彼 岸

我孫子 丸 山 三枝子

雨傘を日傘となして霊園に辿りつきたり 桜いまだし
足萎えの三人をバスに送りつつ手をふっている霊園入口に
遠からずわたしもバスで行くだろう墓原までの春の坂道
今年また皆できましたお父さんお母さん犬のバス、春ですよ
隣接のA区の寺山修司の墓しんかんとして卒塔婆立てり
卒塔婆は死者への手紙 修司の墓に新しき塔婆立ちおり
開かれし本を被ける墓石に掌を合わせれば子らもしたがう
そこに立てと言われて春の墓の辺に撮られておりぬ嫁のスマホに

作品一特選



(六月号作品、五選者共選)

花粉症

習志野 石井雅子

「耳たぶの固さに」と言はれ白玉粉捏ねつつ耳たぶ触つてみたり
いつ咲くかと日本中で待つさくら標本木が連日映る

ストーブがラブミーテンダー歌ひ出しカノンがなれお風呂が沸いた
九十歳の「運び屋」のクリントイーストウッド見たしとシネコンへ行く
つね日ごろ強気な人が可愛いな目鼻うるうる花粉症です

マスクかけ眼鏡をかけて地下鉄でピアス片方落としてしまへり
カフアールと洒落た仏語の名前もつゴキブリと会ふ しばしフリーズ

百万時間

東京 西野美智代

ギネス・ブックに載りたる老いが怪訝さう百十年は百万時間ぞ
古家の庭に積まれしがらくたの中で片目のダルマが睨む

オーロラの記述くはしき明月記 天文遺産に認定される

葛湯

川崎 飯島智恵子

「メ切りは厳守すること」嵩張つていた肩の荷をポストに落とす
くれぐれもドンと座すなと言われたり圧迫骨折案ずる夫に

ワンテンポ遅れてものを思い出す 葛湯とろとろ溶けてゆく昼
ご迷惑でなければなどと神妙な顔して息子がぐる土産を提げて
「あの馬鹿が」夫が息子をよぶときの弛ぶ横顔みてはくそ笑む

救急車奥まで行かずわが家の垣根にそいて今日も停れる

息炎であるとう証の外出と自ら言い出掛けてきたが

申告

東京 伊藤康子

あじさいの固き新芽のふくらめりさ緑萌ゆるまであと少し
出荷後のキャベツ畑に空席のごとく外葉の広がり並ぶ

オキザリス連翹すいせん黄の花を集めて光の明るさが増す
税務署よりネット申告のご案内混むから来ないで自分でやってか
カンタンな申告作成画面らし 自転車こいで税務署へ行く

電波時計なのに勝手な時刻む たまに正しくなったりもする
ネット画面のスポット表示に「三月は自殺防止強化月間」

鶴

川越 相川公子

約束を守りたるよと鶴きて啓蟄の庭に尾羽ふりをり
あしび咲きかたかこが咲きわが庭はいま万葉の春の野となる

ジャガイモを植える人らで賑はひて市民農園春うららなり

滅入る日は唱へる「魔女の宅急便」のいいことありそ、いいことありそ
シングルマザーの道を選びし四十歳が復帰の舞台にたをやかに立つ
イチローが惜しまれつつも引退し辞めて欲しかる人は居座る
福砂屋のカステラ友に送られてにんまり食みし妣思ひ出づ

スランプ

川崎 大井田啓子

スランプはいつまで続く行く手なる紫木連いま花盛りなり
凡人にスランプはないさはされとスランプといふ響きやさしも
区役所にそびゆるアンテナ、拡声器われらを見おろし我ら見上ぐる
十五分遅れのバスが到着すスランプなどと言うてくるな
さりげなく咲き始めたる菜の花がわつと盛りぬわが庭のこと
トラックを道ばたに止め花を売る男をりたり春のほり坂
洪滞で十分遅刻すスランプを棚上げにして小走りとなる

雛持て成す

東京 朝香ふさ枝

春・伊豆・磯釣と検索すれば眼仁奈出ず黒く光れるその魚を食む
磯ぶきと伊豆で呼ばれるつわ藪の春の野草はみなほろ苦し
麗らかな日和となりて堂ヶ島 蟹這うごとき岩のほる人
すさまじく楠の落葉が散る夜をめざめて春のことぶれと聴く
さらさらと楠の落葉を掃き寄する暫く朝の仕事となりて
娘も孫も外国なれば今宵ひとりばら鮎つくり雛持て成す
脱ぎ放つ靴が昨日の形して玄関にあり独り暮しは

解体の作業員らは日本語を上手に使ひ挨拶をする

四時間あまり待ちて血圧はかられて一月分の葉をもらふ
人ならば虐待ならんきゆうくつな鉢に植えられ君子蘭さく

無人駅かこみて広がる梨畑むかしのままにふる里はあり

師の故郷

埼玉 八木橋洋子

埼玉は他郷と詠みて和歌山に恋い焦がれつつ逝き給いけり
師の故郷の思い出話す師はいない潮岬の風に吹かるる

師の歌集「海に向く」持ち今われは師の産土の串本にいる

海に上る朝日拝む有難さ師を育みし海に來ている

吊り橋は渡れぬ友を置き去りに「八潮の吊り橋」渡り切りたり

あつけなく逝きたるみつぎ先生の故郷をゆくバスに揺られて

リウマチを発症してから二十年熊野古道を難なく歩く

落椿

倉敷 水本美恵子

二メートルは越ゆる椿がぼたぼたと落ちる落ちて木下あかるく
庭に出で落ちし椿を集めをり振り向けばまた新たにひとつ
乳液の残りの滴を浴びる程つけておだしきひと日の終はり

去年の葉をきれいさつぱりと去ればクリスマスローズの花が生きいき
米五キロ干しいも二キロありがたう宅配便来てよいしよと降ろす
みどり色の花が咲いたよキプシ咲く庭の菜の花あしらひに活く
丈低きラッパ水仙群れ咲きてべちやくちやしやべるうらら日

作品二、三特選



(四月号作品から) 桜井京子 選

〈作品二〉

母のとなりで 柏江口 絹代

良き母であったと思えず 扇風機の風量弱に吹かれておりぬ
いつのまにかジョニーウオーカーは消え失せて母の茶筆筒の棚のスカスカ
淋しいと言わずに生きて衰えてすとんと椅子に座りいる母
九十六の気持になれと言われても バタバタ音立て廊下を走る
親子連れの雀を愛でる母はむかし長兵衛さんの三女であった
樹を叩くコケラの音を聞いており霜月二日母のとなりで
・老母との暮しを戯画化して読者を飽きさせない。

鯛 尾道 岡野 甫江

初釣の尺越えの鯛を掲げ来て子は正月の平穏やぶる
組板の大鯛の頭おさへつつ正月われの手元の怙む
恐る恐る捌きし鯛の身すきとほり片身はそのままお隣さんへ
タブレット片辺に鯛のカルパッチョ何とかな仕上がる見栄えよろしも

おだやかな正月茶しし鯛なれど刺身鯛めしカプト煮となる
初釣の大鯛といふめでたさをうから喜び味はひ尽くす
・初釣の鯛が厨歌の連作となり初春の日出度さを際立たせた。

夕間暮れ 福岡 中村かよ子

栓無きことで堂々巡りの夕間暮れ日にち薬を飲み忘れたか
わたしにも行方の分からぬ孫一人おります 夕暮もう夕暮れぞ
自転車充電気になる夕間暮れ寒さ紛らす後5パーセントが
トラウマに突然震える犬を抱く取り付く鳥もなき瞳して
胃の痛き時は胃だけが空中をゆっさゆっさ歩めることし
・漠然とした不安をベースに、その狭間に見え隠れする詩を捉えた。

新年会 さいたま 松沢みどり

神妙な顔して社長の話聞くわれも組織の一人であれば
新潟の支社より届きし日本酒が新年会の机に並ぶ
いつもより静かな課長はひたすらにキーを打ちおり時折強く
バキボキと主任は指を鳴らしつつパソコン画面睨みつけたり
知らぬ間に我は誰かを傷つけてひび割れだらけのマコロン齧る
真昼間の冬の木漏れ日溢れきてわれもひとつぶの光になりたし
・職場の風景に溶け込みながら、人間観察に鋭さがある。

寒の満月 安来 岩田 明美

「上等の月が出た」とふ夫の声平成最後の寒の満月
平成が百日を切る寒の月美しと見る背筋伸ばして

抽斗に眠つてゐるが算盤は昭和の頃の相棒だった

・時代の節目にあつて変わりゆくものを捉える視点がよい。

残りの日々を 鎌倉 杉山ますゑ

ばら園に季節外れの白き蝶迷ひこみしがいつか出でゆく
夫逝きてただ無我夢中なる日々(じふ)の庭に彼岸花わつと咲きいづ
大勢で見れば歓喜の彼岸花ひとりぼつちで見れば切なし
・みずからの境涯に自然の景物を重ねて思いを深めている。

駅伝 藤沢 牧田 明子

重なれる人らに押され揉まれ来ぬ箱根駅伝まつぶさに見む
肩にかける「襷」に担う「つなぐ」とは 一月の風光りつつ過ぐ
選手らの死闘を見つつ沿道のわれら一時(じつ)同士となれり
・箱根駅伝のひたむきな若者たちへの熱いエールが見どころ。

街路樹 札幌 三浦 伶子

街路樹の散りゆく路を散歩する去年とは違う足の運びよ
公園のベンチ払われゆつくりと進む冬への街並みである
一色に灰色の街となつた朝人の息など聞こえてこない
・冬へ向かう季節に佇み、自身の冬支度を凝視する。

銀杏抒情 東京 武藤 昭彦

五十年後のぎんなん好きに馳走せん大粒より庭に埋める
しゃがむ度ひびが小さな悲鳴あぐ そろそろやめるか銀杏ひろい
数粒のぎんなん残る細枝に銀杏の新芽の膨らみはしむ

・ぎんなんを愛し銀杏とともに生きる作者に心境の深まりを期待する。

〈作品三〉

小言は言うな 千葉 竹本 幸子

冬木立あつばれなまで葉を落とし空はどこまでもたつぷりとある
娘との台湾ツアーに出かけたり小言はいうなとくぎを刺されて
空港で台湾ドルを使わんと残りの小銭でヤクルトを買う
・確かな視点と巧まざるユーモアが持ち味。旅行詠も楽しい。

頬っ被り 常陸大田 藤本佐知子

初夢は今宵と決めていざ寝ねん不眠のあとの熟寝(うづま)の夜を
「吉報は寝て待て」というしかあれど寝てはいられぬ朝がまた来る
道ならぬ恋がお決まりなにぬねの夫が録画の刑事物語
・アイロニーと遊び心で読者を愉しませる。

見える感情 行田 安田 恵子

ベデイキュアを赤く塗れども気の晴れず腹おさまらぬ汝のひとこと
子等あそぶ階下に突如「大嫌いッ」見えぬ姿に見える感情
何と無く意のかみあわぬ夫と食む水(みづ)下魚の骨力チリと堅き
・二首目の意表を突いた把握、三首目の鬱屈した心理の描写が巧みである。

池の水面 東京 中村 陽子

クレーンが池の水面に映りいる実物よりもくつきりとして
ユーミンとサザンに刹那かがやきて平成最後の歳が暮れたり
・対象と向き合う眼差しの確かさ、切り取り方が鮮やかである。

城 富貴美

公園の春

十日経ぬ間にたいせつな人ふたり旅だちゆきぬ師と弟と
 みつぎ師の子息なる声ひかへめに師の葬りの子細かたりき
 雛の日の空ほの白く履はれてみつぎ師身罷りはやも五カ月
 催花雨の湿れる地中にわが心うづめおかむか 水仙ひらく
 わが折りし雛をまえにひとりのむ女冥利の白酒うまし
 三水さんすいのつくものが皆なんとなくほわんとゆるむ気配の弥生
 孫の言ひし「トトロの森」にをしどりの好む団栗拾ひて戻る
 をしどりの好む団栗なげる度に五十羽ほどが水もりあげる
 夕映えの池のおもてをしどりの番しづかに水脈ひきゆけり
 白梅にメジロ二羽来て遊べるに出会へてけふのひとつ良き事
 餌をもて近寄るわれに緋メダカから緑の藻中に身をきらめかす

近詠十五首

ひと言随想

自然に触れて

ニュータウンとして、千里丘陵が開拓されて六十年になる。人工の此の街に住んでもう五十五年になり、故郷以上の愛着を覚える。一丁目から三丁目迄ある私の町には、戸建てが一軒も無く、五階建てから五十二階建てまで、様々な階層の集合住宅ばかりである。冷やかに見えるビルの町にも、随所に緑地や自然に触れる公園も在り四季が堪能できる。家の周囲にも、溜め池を囲む自然林の公園

池の辺を歩くわたしの白髪を逆立てて吹く春の疾風は
 切り株に斧もて向かふ少年を見ぬ振りしたり逢魔が時を
 老犬と老いが互ひに曳き曳かれゆるりゆける公園は春
 三本の駅への道を気分にて選りゆくけふは「こぼれび通り」

が三箇所有り、何も徒歩十分と掛からない。孫の幼い頃「トトロの森」と呼び、団栗などと遊んでいたのが昨日の様に思い出される。また、生駒山に昇る太陽を窓辺に仰げるのも有り難く、早起きをした時の賜物と思う。進歩の無いままでも、好きな歌が詠めて、ペランダの花やメダカに声をかけ、一日一日を大切に過ごせたらいいなあと願っている。沈む夕日を、しみじみと見送りながら。

村野次郎への旅 (111)

「地上巡禮」と次郎 (四)

千々和 久 幸

「地上巡禮」第壹巻第參號は大正三年(1914年)十一月一日に発行された。本誌五八頁、他に広告が薄紙で巻末に十四頁ほど付されている。誌面全体の印象を言えば、「詩とエッセイ」という趣の編集で、短歌専門誌という感じはしない。

構成は巻頭に「巡禮詩社の言葉」を掲げ、次いで白秋の8行ほどの短い詩「掌」が、これも一頁建てで組まれている。短歌は「散華集」には同人八名が各一首(白井史郎のみ二首)を発表、村野先生はこの欄に「羅漢柏」一首を出稿。

続いて室生犀星の詩「戀を失ひたる人」「狐」「霜」、萩原朔太郎の詩「天景」「雲雀料理」「青いゆき」、山村暮鳥の詩「哀楽園」「手」「十月」、吉川惣一郎の詩「香爐の秋」「球形の鬼」が掲載され突如、河野慎吾の短歌「鈴鴨」二十二首がくる。

「突如」と言ったのは、常識的なレイアウトからすれば八名各一首の「散華集」より、河野慎吾の大作二十二首を前に出した方がより見栄えがすると思つたからである。まあそれはわたしの個人的な趣味に過ぎまい。この程度の斬新さ(?)は、白秋にとつてはもの数ではないのである。

現にその河野慎吾の短歌の後には、桑原隆人のエッセイ「安居録其二」、赤木桁平のエッセイ「ラオコンの集像(對話)」、増野三良のエッセイ「ギタンヂャリ三章」が続き、再び詩に戻り、海野現一の「人の世の秋」「菊畑」「秋行」、栗田朱鳥の「飛行船戦第一報」「忍夜戀之曲者」がくる。さらに室生犀星のエッセイ「林中思念」を挟んで、みたび短歌「秋晴」欄(?)に八名が出詠(一首から五首まで)、「野化場」欄(?)に二十二名(二首から六首)、「蜻蛉集」に十三名(一首から四首)。選

歌数は各欄を問わずまちまちである。

頁を追っていけばその後再び萩原朔太郎の詩「遊泳」、白秋の詩「消防整列」、そしてエッセイ一編があつて、尾山篤二郎の短歌「郊外餘情」九首、みたび白秋の詩「白金の獨樂」と誌面は目まぐるしく動く。白秋のなかではこれで誌面の統一が保たれているのである。常識人からすれば、何処までが正規の誌面でどこからがうめ草か解らなくなる。

とにあれこの号に発表された村野先生のたった一首(白秋の選に採られた一首と言ふべきか)を読んでもこう。

・ 死餐かすかに光るけはひにて羅漢柏の小枝

村野 次郎

刈る人の見ゆ
一読して「死餐」「羅漢柏」という素材がま

ず珍しい。餐なら師白秋の詩歌ではお馴染みだが、「羅漢柏」は広辞苑には「らかんはく。アスナロの漢名」とある。

井上靖の小説「あすなる物語」にある「明日はヒノキにならう」の、あのヒノキ科の常緑高木で、あすはひのき(翌松)である。

一方の餐については、即座にこんな詩句を思い出す。

及び「社友消息」を読んでおこう。

□「地上巡禮」第參號漸く成る。二十八日、秋晴明らかなれと思ふ事深し。予等は益恭虔ならざる可らず。幸に社友諸子の健康を祈る。

□詠草の選抜は今なほ嚴峻なり。未だ時機來らず。たゞ暫く諸子の苦行精進を待つ。

□來春一月の本誌をして、願くば濼爛たるものならしめよ新人出でよ。更に願くばわれをして新進推讃の矜持たしめよ。踴躍念々、抑ふるところを知らず。

□「地上巡禮」第參號、號を重ぬる毎にわれらは飛躍し、向進せり。幸に諸子の自愛を祈る。

白秋の敬虔なる祈りと、烈々たる闘志が伝わってくる。次いで「社友消息」から。

□本社十月小集を十六日深川の宮川にて聞きたり。來會者二十數名。その夜われらが爲めに翳間藝妓半玉の數名を贈られたる特志の女人に感謝す。なほ當夜醉餘會費を取る事を忘れたるが如くおはゆ。同じく忘れて歸りし人は本社迄御送附を乞ふ。

□白秋の「雲母集」は都合により多少遅刊することあるべし。

思ひ出は首すぢの赤い餐の
午後のおほつかない触角のやうに、
ふうわりと青みを帯びた
光るとも見えぬ光?

詩集「思ひ出」序詩(明治44年6月刊)

・ 昼ながら幽かに光る餐ひとつ孟宗の藪を出
でて消えたり
・ 一つ火のさ緑の餐息づき明り雨しとど降り
し闇を今あがる

「雀の卵」(大正10年8月刊)

序詩の思い出のイメージは朦朧としているが、「首すぢの赤い餐」に少年白秋はよほど強烈な印象があつたに違いない。この餐から思ひ出が導き出された、というのだ。

この餐を短歌に援用して新たなイメージを造型したものが、後の二首。二首目は五八七八八拍の破調だが、写し間違ひ(一!)ではない。いまわたしの思ひつきを言えば、白秋が後に「多磨」で掲げることになる「近代の幽玄体」は、このような作品の延長上に企図されたものではなかったか。

ところで村野先生に、白秋の餐がどの程度

に意識されていたものか。白秋作品は今回の村野先生の作品より前に発表されているから、村野先生は師の「餐」を当然読んでいる。読んで新鮮な感動を覚えた。そこで自分も餐を素材に詠んでみたいが、単に素材にするだけでは芸が無さすぎる。

そこで一捻りし師白秋にはない「死餐」を創出した、と思うのは穿ち過ぎだろうか。いづれにしろ、白秋の餐が意識にあつたことは間違ひなからう。

さて先生の「死餐」は「光るけはひにて」だから、死んでいるのか生きているのか実のところよくは解らない。餐は幼虫も蛹も卵も光ると言われているから、ここはその雰囲気を醸成すればいい。

そんな籠気に見える気配に、羅漢柏の小枝を落としている人の影が動いている、というのである。このあえかな氣息の向こうに、バントマイムのような人影を認めたのだ。この詠い口はやがて「ソフトフォーカス」として「香蘭」内で普遍化されることになる。青年村野次郎の詩的宇宙の誕生である。

巻末の白秋の「社報」のうち「地上巡禮」